

四月の保育環境

山口たつ

それぞれの幼稚園は、新年度を迎えて、集団生活への期待と喜びに幼い瞳を、きらきらと輝かした大勢の子どもたちが、母親に手をひかれ門をくぐってくる。その子らを、私たちは相変らずの気持ちで、環境で迎え入れていいのだろうか。

マスコミの中で絶えず強い刺激をうけて育ち、「現代っ子」と言われる幼児の実態を、われわれ幼児教育者は、しっかりとつかんでいるだろうか？——こうした反省の上になつて、新入園児を迎える、環境造りの問題を考えてみたいと思う。

各園がそれぞれの伝統にしたがつて、楽しい雰囲気構成を、工夫しているのだが、その感覚が果して、子どもに新鮮な興味をもたらしているだろうか？ このことを部屋飾りについて考えてみるのに、天井や、壁を、桜やチューリップなどの花で飾りたてて、美しい環境構成をしたと、自己満足している。三才児の部屋も、四才児の部屋も、五才児の部屋も、たいして変化のない整備の仕方、すこしてきているのではないか？——あまりにも個性

のない、そうした環境づくりを一考してみたい。

ではどうしたらいいのか？——子どもたちは、家庭という肉親にかこまれた生活を離れ、初めて、同年令の見知らぬ同志の集団生活に入るといふ事実と、家庭の居間とは全然異なつた、広い教室という場とを、よく考えて、できるかぎり、家庭に近い、雰囲気構成をしてやるのが、初めは必要だと思ふ。

そうした気持ちで教室の窓には、カーテン（四季変化をつけることのできる紙で工夫する）をかけたたり、部屋のコーナーを利用して、五、六人が座ることのできる小さな部屋を、カーテンで仕切って作つてやる。そこに絵本、ままごと道具などを置いて、家庭の居間の感じを出して、安らぎを与える場所にした。集団生活の疲労をいやす点からも、とくに年少児にはこうした配慮が必要である。十六坪の保育室に、四坪位のままごと部屋が付設されていれば一番いいと思う。この場合は、この部屋の飾りつけは、家庭の居間を再現して欲しい。ラジオ、テレビなども、設置でき

れば理想的だが、実物でなくても、小道具で、ダンボールなどの箱を利用して造っておくのもいいではないか？　このような作業は、年長児（在園の）に共同製作としてさせる。新しい友だちを迎える喜びと、年長児としての自覚、誇りといったものが、こうして製作を通して、実感として湧いてくると思う。

担任教師が一人で準備することには限度があるし、おもしろみもない。もっとすべての子どもに参加させ、教師と共に生活の中で、他人のために役立ったという働く喜びを、現代の子どもにはとくに味わってもらいたい。こうした計画は単なる思いつきでなく、年間を通じてカリキュラム中に、もりこんでいきたい。

在園児は入園式の四日程前に始業式をして、登園させ、こうした部屋飾りに参加させることが望ましい。

またこのような機会に、現代の子に欠けている、小さい者、弱者をいたわるやさしい心根を育てることもできると考える。

次に、幼児に新しい社会が、家庭と同じような、親しみと、安らぎのある楽しいところであると感ぜさせるための配慮を、年齢別に考えてみたいと思う。

三才児の場合は、個々が友だちというものより、まず教師と密着したい気持ちが強いかから、席のとり方もよく考えて、初めの一、二週間は、部屋の机は、むしろ必要ない。隅の方へでも置いて、中央に椅子を一行に、半円形に並べ、自由に席をとらせる。教師はどの子どもの顔も見ることのできる場所に位置する。

楽器もそのように置くことが望ましい。幼児は、一人ひとり

が、教師の顔をはっきり見ることができて、安定する。十五人から二〇人位の子どもは、一人ひとり、しっかり視野の中に入って、一日に何回も個人的に話しかけられることが大切である。二、三週間位して、自然に友だちが、砂場遊び、積木あそびなどを通して意識されてきた時、四人位の子どもの名前を、机を配置するといふ。グループの名前も、好きな果物の名をとって、つけてやりたい。――バナナ、リンゴ、ミカン、イチゴ、など身近なものを考えてほしい。花や動物などは、もう少したってからつけた方がいいと思う。机の上に果物かごを置いて、紙で作った果物に名前を（グループの子どもの）かいて入れておいたら、自然に友だちもおぼえるのではないか。

四才児の場合は、ある程度、隣近所の地域的な友だち感情も発達しているので、地域的な配慮をして、グループ配置をすることもいいと思う。四人〜六人位のグループで、机を教師の方に向けて腰掛けることのできるように配慮する。グループの名前も、花や動物に、こだわらないで、テレビに出てくる一番好きな人物、アトム、ボバイ、鉄人二八号、忍者でもいいと思う。気易さをもたせる配慮が必要である。その人物を厚紙にかいて、机の上に立てておいたら、一ぺんに幼稚園が楽しくなってしまう。こうした楽な気持ちで部屋飾りをして欲しい。天井にアトムがとんでいたり、お星様が輝いて、美しい花園が月の中にあってもいい。もっと、もっと子どもの現実を持っている夢を、理解して、教師も新入園児を迎える環境構成に、新機軸を出したいものである。

女性らしい情緒や、ムード、感覚でのみ環境設定をしないで、宇宙とか、科学とかの、夢も大きく子どもの中に育てていくようにしたい。

五才児の場合（一年児）あまり地域にこだわらないで、生年月日を基準にグループ構成をして、席を作る。人数は、五、六名がやはり適当である。四才児と違って社会性もできているし、他の友だちとも馴染みやすくなっているから、新鮮な気持ちを持たせる意味においても、生年月日によって、平均したグループを設定してみるのもいいと思う。そして四月、五月生れの男の子、女の子を、「おとうさん」「おかあさん」とし、生れ順で、「兄さん」「姉さん」をきめて、グループで、家族構成をしてみるのも親しみができて、早くグループ活動ができるようになる。グループの名称も、動物でも植物でも天体でも好きな名前をつけさせ、自分たちで標式を考えて、机の上になてさせる。

それに、数字と名前をかかせる。部屋飾りも、全部完成しておかないで、教師は、基準になるものをつつ作っておいて、それに付する細かいものは、子どもたちと相談しながら、考えさせて作り、漸次飾りつけるような方法を取り、初めから、五才児の能力を自覚させるような、扱い方を考えて欲しい。四才児と同じような状態で持つていく従来のやり方を反省したい。持物の置場所でも、グループの名称がきまったら、それを絵で表現して、他は数字で、①②③の番号で記憶させたい。生活の中にこうした、文字、数字をとり入れても、現代の五才児は、そんなに抵抗を感じ

ない。テレビのチャンネル、コマースシャルなどで日常生活の中で親しんでいるから、こうした知的能力の芽生えも、確実に生活の中で、遊びの中で、伸ばし、育てていくべきである。

私たちはすべての面で一般化し、庶民化してきた幼稚園教育をもっともっと広い視野にたつて考えていかなければならない。

環境設定にしても、従来の方法や考え方から脱皮して、現代の幼児の生活に、一番密着した方法は何であるか？ そこからまた未来に大きく力強く、羽ばたくためには何を育てるべきか？——こうした事柄を真剣に考えて取りくんでいきたい。そしてこの中で、この時期でなければできない人間的に豊かな、美しい感覚、情操を育てていくことも忘れてはならない重要な要素だと思ふ。受け入れの初期においては、前述したような考えで進み、漸次安定したら、幼児の日常の生活で、経験することのできない面の環境構成を、意図して幼稚園でしてやる必要がある。それは、広い豊かな経験をさせることによって、すべての能力の発芽を促進することができるからである。

このような構想のもとに、年間を通じて幼児をとりまく、屋内、屋外の環境設定が、科学的に計画されていくならば、教育の成果をより昂めることができると思ふ。そのために、教師は、時代の感覚をしっかりと身につけて、幼児をとりまく社会事象を、深く見きわめ、理解していく不絶の努力と、精進が必要である。

（名古屋 青葉幼稚園）